
純情ロールケーキ

蝶野夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純情ロールケーキ

【Zコード】

Z3823W

【作者名】

蝶野夜

【あらすじ】

賄賂はロールケーキ一本。違うクラスの委員長達から全く関係のない玉城楓が頼まれたのは留年した不良遊佐武瑠を授業に出るように説得すること。

“白虎”と呼ばれる遊佐は意外に怖くなくて、でも、何だか訳ありで……毎日学校に来て屋上にいる理由は何？

自サイトで短編として掲載したものの連載版です。

屋上は虎の住み処

本日、快晴。

窓の向こうは憎らしいぐらいの晴天。
雲のない空、でも、私の心は曇天。

ああ、憎い。何が憎いのかわからないくらいに。

ゆつくりと上がる階段。

このまま辿り着かなければいい。

一段昇るごとに思つてゐる。

最後の一段、隔てる扉、その向こうに……

鍵がかかっていればいい。そう思つて、ノブを回せば、開いていく。

次に思つことは、誰もいなればいい、で

扉を開けて、初めて踏み込んだ屋上という立ち入り禁止領域。
飛び込んで来る蒼穹、でも、私の頭上には積乱雲があるみたい。
願いも虚しく、人がいる匂いがした。立ち上の紫煙、嫌いな臭い。
でも、ここまで来たら引き下がれなくて。

さつきから同じ映像が頭の中でリピートしてくるから。

だから、もう私はその人の前に立つて、ここに来る間に何度も考
えた台詞を言うしかなかつた。

そこにいたのは金髪、脱色しきつた白っぽい金髪。

座り込んでつまらなそうに煙草を吸つてゐる。

正面に立つた私を見上げる田舎、獣のようだといつて見えた。
けれど、それはすぐに驚いたように見開かれた。

「お前、何で……？」

乱暴にイヤホンを外して、心底、驚いたようになんの声は吐せ玉れ
れた。煙草がぽろりと落ちたつになるくらい。

何をそんなに驚くことがあるのかわからない。

ここは彼の縄張り、そう聞いている。だから、他の人間は踏み込

私は踏み込んでしまつたけど、それはそんなに驚くこと?

「一年A組、遊佐武瑠さんですかね？」

特徴は一致してるけど、念の為に確認する。
私は間違いなく遂行しなければならないから。

「あー、やうだナビ?」

「ハハハ」と遊佐さんは笑つ。ビックリ楽しむ、嬉しそう。

「私は一年F組、玉城楓です」
たまきかえで

まずは礼儀として名乗つたけど、遊佐さんは声を上げて笑った。

「堅苦しいのはこよ、楓ちゃん」

一
おあ

いや、何で、いきなり名前で呼ばれてこられるのか。

遊佐さんにてそしーしー人?

想像と、ちょっと雰囲気が違う。

でも、それでも私はやらなきゃ。やるしか……

「それでは、遊佐さん」

「だから、堅いって。武瑠でいいって」

本題に入らうとしたら、遊佐さんが文句を言つてきた。

いや、だから、こういう人だけ？

ダメ、惑わされるな、流されるな。私はやれる。

「单刀直入に言います」

「うん、いーよ」

息を吸い込んで、はつきりと聞こえるように言えば、遊佐さんは笑顔で頷いて……

何か頭の中の遊佐武瑠像と激しく食い違つてゐる。物凄く感じが良い。

でも、遊佐さんは不意に考へる仕草を見せた。

「いや、やっぱり、待つて
「はい？」

何だろ？

心の準備が必要なのか。

「こうこうのは俺の方から言つた方がいーよな？」

「いえ、あの」

いや、どうこう」となんでしょう？

私の言いたいことはわかつて、先手を打つもつなのか。

「来いよ」

一瞬、言われた意味がわからなかつた。

「見上げるより、見下ろす方が好きなんだ」

遊佐さんは笑う。

遊佐さんは座つていて、私は少し離れて、正面に立つて……

「同じ高さで話さないのは駄目ですね。失礼しました
「もつと近くに来いって」

誠意の問題だと思つて、その場に座つたけど、遊佐さんは更に要求してくる。

いや、これ以上はひょっと近すぎないですか？

煙草の臭いがちょっときつい。

「照れんじゃねーよ。ここまで来れたじゃねーか

照れてません。照れてないんですけど?
もしかして、遊佐さん、何か勘違いします?
いや、まさか、何を……?

「ああ、やつぱり、俺から行く方がいいーか

だから、やつきから何なんですか！

この際、一致しない遊佐武瑠像はどうだつていい。

私の目的はただ一つ、その達成の為には決して流されない」と一

「授業に出てこなさい。」

私の目的、それは遊佐武瑠に授業を受けてせしむる。」
ただ、それだけ。
たつた、それだけ。

「は？」

「お願いですから、もつ授業をサボらないって誓つて下かこー。」

遊佐さんは変な顔したけど、無視。

この人はサボり魔つていうか、学校には毎日来てるけど、全然授業に出てないらしい。理由は不明。

「……ああ、一緒に卒業できねーとだせーしな」

少し考える素振りを見せた後、遊佐さんは言った。

一緒に卒業……誰か一年に友達でもいるのか。だって、元同級生とはもう一緒に卒業不可能だし。

ちなみにこの遊佐さんは留年生。理由は病気じゃないってことくらいしか知らない。

「授業に出てくれますね？」

「やっぱ出る気しねーや。クラスチーナーし」

簡単に済んだと安堵したのも束の間、打ち砕かれた。
さつきのつて、考え直したつて答えじやなかつたの？

「授業受けて下さー！」

やつぱり、私つて適任じやない。
やつ思つけど、いつもたら強引に押し通すしかない。

「エッセ、誰も出てほしくねーだろ。俺は厄介もんだ」

遊佐さんは言ひたゞ、そんなの私にはわからない。

「出てほしこから、いひして私が来ているんですよ!」

学校に来てこるのに、授業には出ないなんて絶対、変!
一日の大半をここで過ごすのも絶対、変!

「何でそんなに必死なんだ?」

遊佐さんが不思議そうに言ひつ。

そし私は必死、死ぬ氣で遊佐さんに挑んでいるつもり。

「遊佐さんが授業に出てくれないと私はあの恵々しいロールケーキ代をお財布からグッバイさせなきゃいけないんです。切実なんです!」

そし、ただでさえ少ないと私のお小遣いが今、飛び立とうとしているわけで、それを引き留める為には遊佐さんご授業に出てもらひつかないわけで。

「いや、話見えなくなつたんだけよ」

遊佐さんが変な顔をする。

そうでしょうとも。私だってよくわからないんだから。

「私は遊佐さんのクラスの委員長と副委員長と、遊佐さんを授業に出すつてこつ約束をさせられていくんです。半ば脅しです」

遊佐さんと私のクラスは端と端、私は何委員でもないのに、要するに誰もやりたがらない雑用をやらされている。脅されて泣く泣く。

「ロールケーキって何だよ?」

「はなから私が動かないと踏んだ清い交際と見せかけて実は超極悪な優等生カップルが私の親友に賄賂を送ったんです。一本二千円のロールケーキを丸ごと」

思い出すだけで腹が立つ、本当に。

そんな一本二千円のロールケーキを買つお金があるなら、もっと形のあるものを貢いでくれればいいのに。

「彼女は私の口に無理矢理一口押し込むと後は一本丸呑みつて感じで、あつという間に食べてしまったんです」

あの早業はきっと証拠隠滅だったんだと思う。

当事者の記憶には、もう一度と離れないくらいガツツリ焼き付いたけど。

「食い意地張ったダチを持つと苦労するもんだな

遊佐さんは他人事だからって笑っているけれど、思い出すだけで恐ろしい。

笑い」とじゃない。校内で優等生のフリした悪魔のカップルが罪のない女子の親友を買収し、親友もそれに乗つたわけ……そりやあ、もうノリノリで。

ただ「どじやない。

「とにかく、私は大嫌いなロールケーキを食べさせられた上に全く縁のないクラス委員の手伝いをさせられるんです」

女の子がスイーツなら何でも好きだと思つたら大間違い。全く嫌
いつてわけじゃないけど、スポンジと生クリームが嫌。
適任とかうか、それをやるべき人は他にいるはずなのに、私が何
でこんな目に遭わなければならぬのか。

「だから、授業に出て下さい。」

もう一度、勇気を振り絞つて、誠意を込めてお願ひする。

「モーゆー」となら断る

「そんな……」

あっさり、撃沈。

しつかり断られてしまつた。

「俺を恨むなよ

遊佐さんは言ひけれど、そんなこと微塵も考えてなかつた。

「わかつてます。私が恨んでるのはあの三人です。でも、絶対に勝
てないのはわかつてるんです」

「ダチだから?」

友達だから許せるといふことは今回には当てはまらない。多分、
私の心はそんなに広くない。

「友達は優秀だけです。委員長達なんて今まで話したこともなかつ
たんですね」

そつ、関与してる友達は一人だけ。親友の優香だけ。
委員長も副委員長も全然知らなかつた人。

「なら、何で俺と全く接点のないお前が来るんだ？」

「ご尤もな質問でしよう。」

私も真つ先に疑問に思つたし。

「聞きます？　長い話になりますけど」

それは、短いよつて長い話。少なくとも、一言じゅう無理。

「暇潰しこはなんだろ」

湯佐さんとは言ひはじ、本当に話していいのかな？
私的にいつて言ひよりは遊佐さんの的に。

「不愉快な話になると思いますけど……」

どうしても、話をする上で端折れない部分にきて問題がある。

「ああ……構わねえよ。今更、何言われてもどうつてねえし

遊佐さんは悟つたみたいだつたけど、すぐに「私を見た。

その目に促されるように、私は事情を説明するしかなかつた。

さうそれは遡る」と、数時間前……

賄賂はロールケーキで（回想1）

私と親友瀬山優香の登校時間は早い。

電車が空いてる内に学校にきて、いっぱい話をする。

だつて、丁度良い時間つて凄く混むんだよね。案外本数ないし。今日もそうして、まだ人影の少ない教室で色々話をしようとしていた時だった。

「玉城楓さんよね？」

「そうだけど……」

声をかけられて、振り向けば見たことあるような、ないような…
…な女子。

あれ、後ろに誰かいる？

「あつれー？ A組委員長が楓に何の用？ しかも、副委員長つて
いうか、彼氏付きで」

優香は何だか知り合いみたいだつた。

優香の交友関係つて、親友の私でもよくわからないとこががある。

「瀬山さん、あなたも一緒に聞いて欲しい話があるの」

「ふうん……あたし、これから楓とお話アーンド朝食タイムだから、忙しいの。残念！バイバイ！出直さなくていいからねー！」

何か、ちょっと嫌な予感。

聞きたくない感じ……と思つたら、優香がはつきり言つてくれた。

優香はいつも学校で私と話しながら朝ご飯を食べるから。

優香の食事の時間を邪魔すると大変になるのは、結構有名

な話。

優香自身がちょっとした有名人だから。

「その、デザートになるかわからないけど、良かつたら、これ、食べて」

委員長が出したのは紙袋、その中から長細い箱が出てきて、優香はすぐさま開けた。

中にいたのはロールケーキ。

よく見るとこの紙袋って結構高いお店のだったような……

「へえ、気が利くじやん。まあ、話聞き代にはなるから座りなよ」

しつかりとロールケーキを確保して、優香は一人を空いてる席に促しかった。

現金なのはわかつてたけど、聞きたくないかも……

だつて、面倒臭そうな話は私に向けられてるっぽいから。

恨みがましく視線を送つても、何か予定通りに巨大なおにぎりに齧り付き始めたし。

「私たちは玉城さんにお願いがあつて来たの」「私に……？」

うわつ、本当に嫌な予感がする。

何か人違ひじゃないかとか思いたいけど、最初から名指しだったし……

「そう、君にうちのクラスの問題を一つ解決してもらいたいんだ」

副委員長の方が言つ。

「凄く真面目な感じで、ちょっと苦手な雰囲気……

「うちのクラスの問題、ねえ……訳ありって感じだねえ」

私の気持ちを優香が代弁してくれた。優香は思つたことを口に出せるし。

結構、優香なら何でも許されるってところがある。

「実は、うちのクラスに遊佐君っていう人がいるんだけど……」

今度は委員長が切り出す。

ユサ、君……聞いたことないかも。
でも、優香は違つたみたい。

「あの“白虎”遊佐武瑠しかいないよね？」

「そう、彼、留年してしまって、うちのクラスに入ったのだけど、一度も授業に出ていないの」

「そう言えば、一人くらい留年した人がいるとか言ってたっけ……
うちのクラスにはいないけど。」

「その彼が授業に出るようになって説得してほしいんだ」

「普通れあ、モーゆーのは、委員長の仕事でしょーが」

優香の言つ通りだと思って私も頷く。

だって、私はF組だし、端から端で、全然関係ないわけで。
そうしたら、委員長がシヨンと俯いた。

「そ、本当は私が先生に頼まれたことなの、でも……」

「遊佐つて男は危険すぎる！　うちの嫁にもしものことがあつたら

“ひつするー..”

くわつ、と田を見開いて副委員長が言ひ。

「この人、こんなキャラなの？」

正直、ちょっととした。「ひつた、ちょっとじゃない。ドン企む。

「こんな色氣も何もない地味女、よほどのケダモノがビーしょーもなく食えてるわけじゃない限り『勘弁してくれー！』って感じだと思つけど」

本人を田の前にして優香はとんでもないことに言つた。

「え、貴様あ！ 僕の嫁に向かつて……！」

「楓の方が断然可愛いんだから危ないでしょーが！ あなたの地味嫁には、もしものことがあっちゃいけなくて、あたしのキューートな楓があんなことや、こんなことになつても、いいつて言つのー？」

優香さん？

私、そんなに可愛くないよ？
つて言つたか、何、この言い合ひ。

「正直、俺は全く構わない。むしろ、そうなつてくれた方がすつきりする。許されるならば、是非とも、ケダモノの前に放り投げたいと思つている」

私、可愛くないけど、これはひどいと思つ。

「ひつた、ひどいだるー。

「ひつた、副委員長つてやつぱつ噂に違わぬ二重人格だよねえ」

うん、何か予想外の性格。どんどん好感度が下がってる感じ。
できれば、これつきり関わらない方が幸せだと思つ。

「あ、あの、私、あなたに何かした?
「いや、何も?」

恐る恐る聞いたら、この反応。
「何も、つて感じじゃない。
やつぱり、何かしちゃつたのかな?
この人、本当に全然知らないけど。

「こんな奴、ほつといいでいいよ。こいつ、真面目なフリして、性格
めっちゃくちゃ歪んでるから」

うん、そうさせたいります、優香様。
私には彼のことが全然わかりません。

「大体、委員長がダメなら副委員長が行けばいいでしょ?
めの副委員長なの?」

その通りだと思う。

でも、彼を見たらフルブル震えていて……

「む、婿に行けない身体になつたひびきってくれるー? 田が合つ
たら最後、病院送りだぞ!?」

「それはそれは、是非とも、猛獣の前に放り投げてやりたいね。あ
んたなんか掘られてしまえ。楓もそうなつてくれた方がすつきりす
るよね?」

いやいや、私に同意を求めるても困るから!

「ぐつ……やはり、瀬山は手強いか……」

うん、この瀬山優香様に勝てる人なんてほとんどいないと思つ。

「他のクラス委員さんとかにも頼んでみたのだけど、みんなに断られてしまつて……」

「そりやあ、お断りするでしょうよ。何せ、相手は“星崎の白い虎”だもん

」

それは一体、ぐつこうことでしょうか?

白虎とか、白い虎とか……あれ? 一緒に?

「風紀にも頼んではみたが……」

「あーダメダメ、無駄なことしたね」

風紀の何が無駄なの?

「でも、風紀委員の仕事じゃないの?」

「あのねえ、楓、うちのクラスの風紀委員は誰でしょう?」

「あつ……あの怖い一人」

「そうやつ、うちのクラスの代表的不良にして、学年でも筆頭に数えられる由緒正しい不良さんですよ。頭にハンバーグ乗せた感じの人達」

「でも、他の人は……」

いや、あの一人がダメでも他はちゃんと活動してゐるはず。

「あなたさ、風紀が活動してゐるの見たことがある?」「見えないところで活動してゐるのかも……」

「残念ながら、形だけだ。ビニのクラスからの選りすぐりの不良が集まっている」

「うわっ、風紀委員会つて不良委員会だつたんだ。確かに一番楽な委員会つて噂はあつたけど……。」

「じゃあ、生徒会は？」

「風紀がダメならここしかないと思ひ。」

「あの生徒会が助けてくれるわけないでしょ。今、正にその風紀委員会を肅正しようつて猫様が大忙しなんだから」

優香は生徒会が嫌いらしい。と言うか、いつも生徒会長の南城稜己先輩を胡散臭いつて言つてる。良い人なのに。

“猫様”こと白河寧々子先輩（通称：ネコちゃん）だつていい人だし。

「で、でも、天真君なら……あつ、私が天真君にお願いすればいいの？」

天真君なら、きっと何とかしてくれるはず。
そつか、そういうことか。

じやなきや、私が頼まれるはずなんてないよね。

「天真君？」

あれ、委員長が首傾げてる？

「生徒会副会長の結城天真さん、楓の幼馴染み」

「そ、そんなこと知らなかつたわ！ 知つてた？」

「い、いや……」

副委員長も首を横に振つて……あれ？

「え、じゃあ、何で私なの？」

不思議すぎる。やうこつ口ネしか私にはないんだけど……

「君が結城副会長殿と仲が良いとしても生徒会は動かないだろ？」「そうだよねえ。結城さん、楓には甘いけど、今回ばかりはヒーローも出れないねえ」

天真君はいつも優しくて、確かに私にとつてヒーローだったんだと思う。いつまでも甘えてちゃダメだとはわかってるけど、やつぱり今回は天真君の仕事だと思う。

実は極悪カツプル（回想2）

「それで？」

「玉城楓、君は常に十位以内に入る優秀な生徒だ」

優香が促すと、副委員長がじつと私を見てきた。
いや、それほどでも……

「遊佐には補習も必要になる。君は部活動にも入っていないようだし、塾にも行つていなければ、アルバイトもしていない、要するに暇人だろ？ そんな暇な優等生は君くらいしかいない」

ひ、暇人？

今、この人、私のこと、暇人って言った？

「暇じやない！ 帰つたらテレビをいっぱい見るの！
「それを暇人だって言うんだ！」

カツチーン。

何で、今日、初めて話すような人に暇人とか、言われなきゃいけないの！？

「あんた、楓の趣味馬鹿にしてると、痛い目に遭うよ？」
「いいや、塾に通う僕たちからしたら十分に暇人だ！ 実にたるんでいる！」

「うつ……テレビから学ぶことはいっぱいあるの！」

アニメもドラマもバラエティだつて大好き、ニュースだつて見てれば、誰との話題にも困りません！

結構誰とでも何かしら話を合わせられる自信はあるのです！

「聞いた話によると、君は実際に低俗なDVDばかり購入してこるらしいじゃないか」

「低俗？」

委員長が首を傾げる。

「うん、でも、私は副委員長が言いたいことがわかつてしまつた。

「B級洋画馬鹿にすんな！」

「この際、何で副委員長が、私がB級洋画のDVDを買い集めていることを知ってるのかはどうでもいい。

「下品な言葉を使って、何でも破壊すればいいと思つてゐ、これを低俗と言わずとして何と言つかー！」

聞き捨てならない！

「破壊の美学がお前なんかにわかるかー！」

「わかりたくない！ あんなものばかり見ていては、いつか犯罪を起こすんじゃないのか？」

「非現実的なワイヤーアクション、銃撃戦、カーチェイス、派手な爆破にムキムキマッショ！」

惜しげもなく莫大な制作費を使ったのに、あんまりヒットしなかつた感が最高なのに！

「あなたさ、頼む気あんの？ ないの？ 楓に喧嘩売つてきたの？」

「ううだよ。私、お願ひされてたはずなのにー。

「玉城さん、ごめんね？ でも、もう玉城さんしか頼れる人がいな
いの」

「少し言ひ過ぎた。是非、お詫びにそのロールケーキを食べてく
たまえ。君の為に買つてきたんだ」

委員長は申し訳なれやうにしてるナゾ、副委員長にはやつぱり喧
嘩を売られてるとしか思えない。

「副委員長や、本当は嫌がらせに来たんじゃないのか？」

優香様の言ひ通りじこぞります。

「嫌がらせに一本一千円もするロールケーキなんか買うかー。」

やつぱり、いじのお店高いんだ……。つげつ、ケーキに一千円とか
ありえない。

「つまり、それが自分達を守る値段つてわけ。随分とお安い体だね
「好きだけ食べていいのよ？ 丸かじりしてもいいわ。私も昔つ
からロールケーキを一本豪快に食べてみたいなんて思つてたの
玉城さん？」

「……ロールケーキ、嫌い」

「は？」

「私はロールケーキが大つ嫌いなのー。」

ロールケーキなんて大嫌い！

こんなのもの朝つぱらから出してきたあげくに、一本丸かじりが
夢なんてどうかしてるー。

「リサーーチ不足だったねえ」

「なつ……ケーキが嫌いな女の子なんているはずがないわー！」

委員長さんは言つたが、いるはずないなんてことはない。

「残念、ここにいる玉城楓嬢はケーキ嫌いのありえない女子高生なわけだ」

セウジーにいらっしゃるわけですよ。ケーキ嫌いのありえない女子高生が。

ロールケーキに限らずケーキが嫌い。何が嫌いかと言わればふわふわのスポンジと生クリームが。

「そんな……」

「本当に頼む！ 君しか頼れないんだ！」

「今度は好きな物御馳走するからお願ひ！」

何で、この人たちはこんなにも必死なんだろう。

「一応、わざわざ、こんな贅沢まで買ってきてお願いしてるわけだから、聞いてあげよっか？」

優香さん、あなた、ロールケーキ食べるつもりですね？
もう貰つたものだから、食べるつもりでしょ？

自分の胃袋に納める気満々ですよね？

そういうオーラ出てますから！

「遊佐さんってどういう人なの？」

「ゆ、遊佐君は……」

優香のオーラに圧されて聞いてみたら、委員長が口元をむいた。

「知らないって正直に言っちゃえば？　だって、あの人、全然授業出てないし」

「君の方がよく知つてそうじやないか」

「一年F組広報部（実際そんな部はないんだけど）の優香様に、何と愚かな……！」

この人は超広域のアンテナ持つてるんですよ。
おまけにスピーカーかーっていう人種。この人に秘密を知られたらどうなるかわからなって言われてるぐらい。

「まあ、あたしはね。でも、悪い噂は委員長たちもいっぱい知ってるよね？」

「い、いや、まさか、そんな……」

悪い、噂？

「正直に言つた方がいいんじゃない？ 後から契約違反だってあったしが煽つて吹つかけちゃうかもしれないから」

怖い！

味方のはずなのに、私でも時々優香が怖くなる。それはとっても頼もしいってことでもあるんだけど。

「…………」

黙り込む委員長と副委員長。まあ、無理もない。絶対に何があつ

ても味方宣言をされてる私だって怖いんだから。

「じゃあ、あたしが言おつ。遊佐武瑠、十八歳、白っぽい金髪に黒のよひな田つきの、通称……」

きつと、今、優香の頭の中では、その遊佐さんのファイルが開かれているんだろう。

すると、一人は慌て始めた。

「か、彼は留年して、うちのクラスになつたんだ」

副委員長が慌てて話し始めたけど、それはさつきも聞いた。

「そのダブリの理由つてのがさあ」

「びょ、病気とかじやないんだけどね……」

すかさず、口を挟んだ優香に今度は委員長が大慌て。

そりゃあ、病気じやないでしょ。

何だかよくわからないけど、虎とか呼ばれてる人なんて、怖いに決まってる

「それで、一度も授業に出てきたことがないんだよね？」

「学校には来てて、いつも立ち入り禁止のはずの屋上にいるらしいのだけど……」

学校には、来てるんだ……しかも、屋上。不良の聖域的な？

「つー、それだけ？」

全然、詳しい話じやない。結局、最初に聞いたことの繰り返し。

不都合な事実を耳に入れたくないっていうのが、見え見え。

「じゃあ、彼のわつるーい噂の数々、聞こいやつ?」

優香が一ヤツと笑つて、委員長と副委員長の顔色が悪くなる。聞いちやつたら、断られるのがわかつてゐるんだ。

「まあ、こじめるのはここまでにして、折角略語まで持つてきたんだから引き受けちゃえば?」

何をおっしゃいます、優香さん。

さつきは私の身を案じてくれたじゃない! しつかり、ロールケーキ持つちやつてさ!

「でも、受け取つてむぐつ……」

私は受け取つてない。

私は受け取つて……

「はーい、一口受け取つた」

「うえつ、気持ち悪つ。私は優香のペットボトルのお茶を奪い取つて一気に流し込む。

「じつくん。

「優香こそ私をいじめたいのー?」

「大丈夫大丈夫、楓ならできるって」

いや、何、その根拠。さつきはあれだけ私を守るつとしてくれたじゃない!

「せつこつわけでこの件はこの瀬山優香が責任もつて玉城楓に遂行
れせます故……いつただきまーす！」

わしひと、優香は両手でロールケーキを掴んで、大きな口を開け
た。

「わ、ワイルド……」

「君の口はブラックホールか……」

委員長も副委員長も唖然としている。

あつと言つ間にロールケーキは優香の中の宇宙に消えていった。
そう、こんな時間からロールケーキ一本消失させられるのは優香
しかいない。

「じゃあ、玉城さん、お願ひね？」

「頼んだぞ、玉城楓」

二人は笑顔で、絶対に断れない空気を感じたわけで……
まあ、適当にやるしかないか。

「ああ、そうだ。もう君しかいないと思つてゐるわけだが、君が失
敗した時には……ロールケーキ代を請求するといふのが

「お、鬼！」

一本一千円もあるロールケーキ買つくりながら、DVD買つもん…

「まあ、昼休みにでも行つておいでよ」

「んな無責任なことを優香に言われちやつたりして、今に至る、

みたいな？

まあ、まつたつお皿を食べて、どうとか逃げようと思つたら全部見透かされて、追つ出されたんだけど。

懐柔されそうな飼育係

「暴言の数々を思い返しつつ、遊佐さんにはざっくばら説明するわけで。

「本当は委員長が先生から頼まされたらしいんですけど、副委員長が自分の嫁が傷物になつたらどうするんだって大反対して、副委員長は婿に行けない体にはなりたくないって言って、他のクラス委員にも頼んで回つたらしいんですけど、関係ないうて断られて、風紀は論外で、生徒会も介入しないしで……何か私が暇人だかららしいです

話をまとめるとそういうこと。多分。

「お前、お人好しだからな」

「え？」

「そーゆー顔してるつて話だ」

びっくりした。

遊佐さんが私が散々優香にお人好しつて言われてることを知つてるはずがないよね。

そりやあ、私は優香みたいにはつきり言えないし、断れないけどさ。それ、思いつきり顔に出ちゃつてたんだ……

「つーか、俺を何だと思つてるんだつー話だよな」

いや、“白虎”なんぢやないですかね？

“星高の白い虎”を略して“白虎”なのかな？

よくわからないけど、危険人物つて言つか、猛獸扱いだったのは確か。

まあ、そんなに危険な感じじゃないし、やっぱり噂つてあてにならないのかな？

「副委員長は自分の彼女が傷物になつたら困るけど、他の女はどうでもいいとか言つんですよ？　あの人、相当性格悪いですよ。本性は最悪です。何か私が悪いことしたのか、嫌われてるんです。物凄く。全然知らない人なのに」

全然接点がなかつたはずなのに、どうしてあんなに嫌われてるのがわからない。

「気にする必要もねーだろ。所詮、小者だ」「そうですね」

まあ、別に気にはしてないけど……ちょっとむかつくだけで。

「じゃあ、授業に出て下さいね」「余計出たくないなつた」「そんな……！」

普通、『じゃあ、喜んで』なんて言つてくれないことは思つけど……このまま、引き下がつたらあの性悪眼鏡が何て言つつか、考えたくない。

ロールケーキ代は絶対に払いたくないし。大体、朝っぱらからみんなもの持つてくる方がどうかしてるし、絶対優香を釣るつもりだつたんだ。初めから。

「また、来いよ。いつも、ここにいらっしゃり

遊佐さんが笑つた。

いや、こつも、リリカラが困るんですよ。

「正直、もう一度と来たくないんですけど」

「ああ？」

思わず本音が出ちゃったなら睨まれた。

やせばはつ、『田虎』とか言わてるらしく遊佐さんの睨みは超悪い。

「何でも一発で解決するわけじゃないんだ。そんなに授業に出てほしけりや必死に説得してみるよ。そうしたら、俺だって心変わりすっかもしんねえぜ?」

凄く正じことを囁ひこむような気がするんだが、でも、何か違う。

「じゃあな、楓ちゃん。俺、待ってるから」

予鈴が鳴ってしまって、タイムコントラクションみたいに、遊佐さんがひりひりと手を振る。このまま午後の授業をサボって説得を続けても無駄だと思つ。そこまでできなこし、渋々私は引き下がることとした。

やつぱり、今日が晴天なんて嘘。
どんより曇り空、雨雲。
濡れてここにこにこにこつも雨が降る。
きっと、私が立っているのは多分そいつところ。

そして、遊佐さんと私の戦いの日々は始まったのだった……

と思つたら、一度田は恐るしげほゞ早く訪れた。
放課後、私はもう一度優香に送り込まれたわけで。

「もう一度と来たくないんじゃなかつたのか？ それとも、もう俺
が恋しくなつた？」

遊佐さんは笑う。何がそんなに面白いんだろう。

私は今豪雨のまつただ中つて感じなのに。先が全然見えないので。

「どうした？」

「あの後帰つたら、友達にいきなり消臭スプレー噴射されました」

「ヤニ臭えつて？」

優香は容赦ない。一体、どこにあんなものを隠し持つてたんだろ
う。

「楓ちゃんも煙草嫌い？」

「……嫌いです。大体、遊佐さん、未成年じゃないですか」

親も吸わないし、昔から煙草つて苦手。本当にあの煙、嫌。

「だから、かてーつて。俺、先輩じやねえし。まあ、タメでもねー
けどな」

優香、私には遊佐さんとの接し方がわからないよ。先輩じやない
からさん付けだし、敬語の方がいい氣がするし……

「それとも、俺が怖いか？」

本人を田の前に怖いとか言えるわけないじゃないですか！いや、でも。

「噂の遊佐さんは凄く怖いと思いました。でも、今、田の前にいる遊佐さんは怖くないんです」

あの後、本人に会つたんだから、つて優香は噂の数々を教えてくれた。

“星高の白い虎”または“白虎”、田が合つたら最後、病院に送られるとか、他の学校の不良を半殺しにしたとか、大体同じ感じの噂。

よくある感じだけど、優香が言つては眞実も多々混じつてるとか……。

優香が言つなら、かなり信憑性は高いはずなのに、遊佐さんは怖くない。なぜ？

睨まれたりするとちょっと怖いけれど、でも、剥き出しのナイフみたいな感じじゃなくて……

「ま、いいや。その遊佐さんってのもなかなか……」

遊佐さんは一人でニヤニヤしてる。一体、どうしたんだろう……。

でも、触れちゃいけない気がする。

あ……面倒臭い話題に触れなきゃいけないんだった。

「言ひ忘れてましたけど、遊佐さんは補習も必要なんですね
「めんどくせー」

本当に遊佐さんは面倒臭そう。私だって面倒臭いし。

「私は遊佐さんの補習係でもあるんです」

「別に、俺なんかのために楓ちゃんの時間使う必要ねえだろ」

「でも、私の時間の価値なんか一千円程度らしいですよ」

「随分とロールケーキを根に持つてるんだな」

そりゃあ、根に持たない人なんていないと思つ。
私には何の得もないんだし。

「まずは補習からでもいいですかー。」

授業に出たくないなら、せめて補習からでも。とにかく遊佐さんは一步踏み出してもらわなきやいけないわけで。

「俺、もう帰るけど、一緒に帰るか?」

無視された。

「遊佐さん、補習は……？」

「何か奢つてやろうつか?」

また無視ですか。

「奢らなくていいですから、学業を……」

「じゃあ、映画でも観るか?」

「映画……」

ぴくりと楓センサーが反応してしまった。

「今、何か面白そうなのやつてたよな? すげーアクションの

絶対、あれだ。今、CMでやつてる派手な演出の話題作！

「遊佐さんの奢りですか？」

「そりゃあ、勿論。行くか？」

学校帰りに、それも見たかった映画を、しかも、他人のお金で見れるなんて……！

食べれないロールケーキよりも、ずっとずっとと価値がある。思わず、頷きそうになつたといひで、止まる。私の中の理性はまだ残つていた。

「……だ、ダメです！ 私は買収されませんからねー。」

「いーじゅねーか、これから長い付き合いになるんだ

「な、長い付き合いつて何ですか！ 長期戦宣言ですか？」

長引かせるなんて絶対嫌だ。

「詫びだよ、詫び

「そういうことは授業に出てから言つてくださいー！」

「授業に出たら、お前を映画に誘つてもいいのか？」

「そりゃあ、私でよければこくらでも映画観ますよ？」

遊佐さんが考え込むような仕草を見せた。よし、レコード押しの一言ー

「だかーり、授業に出てくだわー

「嫌だ」「嫌だ」

撃沈。楓号沈没にいたります。もう難破船だよ。元々、オンボロ。

優香なんて豪華客船つていうか、軍艦なんだろつな……

「だつたら、何で、学校に来てるんですか？」

遊佐さんがじーっと私を見た気がした。

「何でだらうな」

やうやつへ、ざべらかして遊佐をひめ鞄を掴んで立ち上がる。

「帰らねえの？」

「補習……」

帰る前にひまつとひまつと黙りながらのぞいていた。

「まあ、今日はいいじやねえか。送つてつてやるよ」

「映画は行きません

「わーつてゐつて」

本当にわかってるのかな? ーJの人。

そんな感じで一田田せミシシヨン失敗。

虎の餌付け開始

「一体、こつまでに遊佐さんを授業に出わせればいいのかは聞いてない。」

「聞かされても困るけど。
ただ長引かせたくない。」

優香に追い立てられるようにして、朝のH.R.が始まる前、屋上に向かう。

遊佐さんはもう学校に来ていた。

「おっ、やつと来たか」

「ひつひつひつ、と手を振る。

「遊佐さん、何で私を待ってるんですか?
「だって、楽しーから」

「私は楽しくない！」

「でも、私なんて遊佐さんにひとつては天から降つてきたおもちゃみたいなものなのかも……」

「説得される気、あります?」

「さあな」

「ガツクリ、頃垂れる。」

「予想はしてたけど、あんまりだ。」

「そつ簡単に折れたら男じゃねーだろ」

男の美学とかプライドとか捨ててトセいや、留年してるんですか
らー！

なんて、言えるわけもないし。

「遊佐さんはどうして授業に出ないんですか？」

「めんどくせーから」

私だつて勉強大好きってわけじゃないけど……

「だったら、何で学校に来てるんですか？」

「居場所がねーから」

矛盾してる。

何で、授業に出るのが面倒臭い人が学校には毎日来てるのか。

「あなたはリストラされたオヤジですか！？　ここは公園じゃないです！　ブランコもありません！」

「間違いなく、学校、だな」

冷静なツッコミはいりません！

「学校まで来るなら授業くらい出ればいいじゃないですか」

「めんどくせー」

また、それですか。

「寝てればいいじゃないですか」

「説得しようつって奴がそーゆーこといつか？」

「だつて、私は遊佐さんが授業に出ればそれでいいんです。そりやあ、補習も頼まれてますけど、授業態度までは約束にあります」

多分、そこからは先生とか委員長達の仕事。

「だからな、俺は嫌われモンだ。出たら迷惑する奴がいる。どうせ、みんな生きた心地がしねえとか言つて、退学しろとか思つてるに決まつてんだ」

「私は遊佐さんに一緒に卒業してほしいです」

「でも、本当は誰も望んじやいねえんだ」

何で遊佐さんはそんなに寂しいことを言つただろ？

「わからないです。遊佐さん、ちゃんとクラスの人達と話しました？」

「話すまでもねえだろ。ま、楓ちゃんにはあの空氣はわかんねえだろ？」「

私は遊佐さんじやないからわからない。

多分、遊佐さんには遊佐さんなりに苦惱とかあるんだと思つたけど……でも、授業に出ないのに毎日登校して何になるんだろ？

「きっと、遊佐さんが心を開けばわかつてくれると思うんですけど、だって、遊佐さんは悪い人じやないって思うんだよ」

半ばつていうか、本当に脅されて引き受けたけど、私は遊佐さんのこと怖いとは思わない。

きっと、みんな、それをわかつてくれるはずなのに……

「俺はワルだ」

多分、遊佐さんはそう思いたいだけ。全く、そういうことをしてないってわけじゃないみたいだけど……

「違います」

煙草吸つてるし、前に暴力事件起こしたらしいけど、根っからのワルじゃないと思う。

つて、あれ？ 今日は吸つてない。

「遊佐さん、今日は吸つてないんですか？」 煙草

「だって、楓ちゃん嫌いなんだろ？ まあ、好きで吸つてたわけでもねーし、禁煙つてやつ」「やつぱり、遊佐さんわかつてくれたんですね！ そつやつて少しずつ進みましょう」

私は思わず、遊佐さんの手を握つていた。

「遊佐さんの手、あつたかい、ですね」

大きくてポカポカしている。

「今、楓ちゃんに触れてるこの手で俺は何人も殴つた。この拳が血で真つ赤に染まるまで」

嘘じやないかもしね。でも、そんなに怖い手だと思わなかつた。

「楓ちゃんの手は冷たいな」

「冷たすぎるんじゃないかつて自分で思つたです」

手が冷たい人はどうのこうのなんて私は信じない。
元々体温低いし、冷え性だし。

「氷に触れられてるみてえだ」

「う、ごめんなさい！」

慌てて手を離す。何、どうやら紛れて手とか握っちゃったんだ
わ。

「いや、なかなか気持ちよかつたぜ」

「ヤツと笑う遊佐さんはちよつと卑猥だった。

「やつだ。昼休み来いよ。一緒に飯食おうぜ」

昼休みはいつも優香と食べてる。でも、優香は行つてこいつて言
いそつ。

「そうしたら、授業に出してくれますか？」

「うなつたら、私はどんどん攻めなきゃいけないんだと思つ。強
気に攻める！」

「まあ、後ひ向きに検討してやるよ」

「前向いてくれなきや困るんです！」 って言つたが、それ、検討しな
いってことですね？』

「の人、手強い。ほんと、手強い。怖くないけど、こわい。

「じゃあ、待つから、そろそろ教室戻れよ」

いや、私は遊佐さんにも教室に行つてしましましたけどね。

「遊佐さんも一緒に行きましょ」

「ん？ そんなに俺といたいなら、サボり」

手招きとかしないでください。
まったく、もう一

昼休み、予想通りとこづべきか、私は優香に追いついて出でた。元気なみつけにして屋上にいた。

手にはお弁当を抱えて。

「おう、待つてたぜ」

だから、待つてないでください。

思わず叫びたくなる。早く、ここのはなしの止めてしまつてください。

渋々、遊佐さんが示す正面に座って、包みを開ける。

「弁当、手作り？」

「まあ、たまにですか……」

いつもわけじゃない。

コンビニパンを買う時もある。遊佐さんみたいに。

毎朝、買つてくるのかな……本当に授業に出ればいいの。

「俺、楓ちゃんが弁当作つてくれたら、頑張れるかもしんねえ
はい？」

「一体、何を言い出すんですかね、この人は。

「それ、本当ですか？」

「まあ、男に『言はねえとか言つよな』

信用できない。だつて、後ろ向きに考へるとか言つし。頑なだし。
私の弁当如きで何が変わるんだらつ。

「毎日とは言わねえから、な？」

うつ……私、お願いに弱かつたんだ。
だから、クラスとか委員会とか何も関係ないのに、こんなことになつてる。

「ほり、材料費」

ポンと五百円玉を投げられる。

「わっ、い、いいですよー！」
「受け取つておいてくれよ。な？」

私は意志が本当に弱い。

「あ、遊佐さん、放課後時間ありますか？」

「おひ、暇だぜ」

そりゃあ、毎日学校に来て暇でしょ」^{ハジ}。

「補習しましょ。五分でもいいですか？」

「嫌だ」

子供じゃないんですから！

「本当に考えてくれてるんですか……？」

「焦るなって。楽しく行こうぜ」

ほんと、お先真っ暗……

*

翌朝の交渉は失敗、そして、お皿。

また私はお弁当を手に屋上に来ている。それも一人分。

「……楓ちゃん？」

お弁当を開けた遊佐さんは固まってる。

凍り付いたみたいに固まってる。蓋を手にした状態で。

「遊佐さん用特製生姜焼き弁当に何か問題でも？」

前にパパが使ってた大きなお弁当箱にご飯を詰めて生姜焼きを敷き詰めてみた。

私のお弁当はいつも通り冷凍食品とかご飯をひびひび詰めたのだけど。

「あんな……」

本当に遊佐さんが戸惑ってる。弁当自体は嬉しそうに受け取ってくれたはずなんだけど。

「まさか、遊佐さんってベジタリアンとかヴィーガンだつたりします？ 豚肉食べちゃいけない宗教の人とか？」

優香情報じゃあ、そんなのなかつたはず！

私、今まで生きててそういう人に会つたことないよー。

「いや……生姜焼きとか好きだぜ？ マジで」

好きなら何でそんなにひきつった顔をするんだろ？
少しさは喜んでくれるんじやないかと期待してたのに……
もしかして、男はみんな生姜焼きが大好きって、前に天真君が言つてた気がするのが間違つてた？

「優香のお弁当を参考にしたんです。いつも大きなお弁当箱にご飯が詰まつてお肉が乗ってるんです。最初はお兄さんかお父さんの弁当と間違えてきちゃつたのかと思つてたんですけどね」

お弁当箱自体、容量重視のシンプルで全く可愛げのない長方形だし。もちろん、色は黒だし。

「優香ママに聞いたら、食べ盛りの男の子はそういうの方が喜ぶらしいんですね。お兄さんなんか折角可愛い弁当作つても反抗して口

ンビニでパン買つたりしてたらしいです」

「俺はちまちました可愛い弁当も好きだぜ？」

男の子ってわからない。全然わからない。

私の中の男の子の基準が天真君になつてるのがダメなの？

「わづですか？ ほほ冷凍食品ですか？」

お金貰つちやつたし、頑張つてみたのに、冷食三昧が良かつたのかな？

「優香に相談したら、コンビニ弁当買つて詰め直せばいいとか言つんですよ？」

優香ならやりかねないとthought。

いや、そんな労力すら嫌がつて私にやりせんんだろうな……

一応、私達の関係は対等のはずなんだけど。

でも、優香が誰かにお弁当作るとか考えられない。

「まあ、俺のために作つてきてくれたんだよな」

「やづですよ、遊佐さんのです」

そうしたら遊佐さんは食べ始めてくれた。

やつぱり男の子だなあつて感じ。一口が大きくて、あつと呑ひ間に消えてぐ。

「ん、美味かつたぜ。楓ちゃんはここお嫁さんになれるぢや」

「本當ですか？」

おへ、と答える遊佐さんは嘔吐いてなこと無い。

「何か感動しますね」

「俺のお嫁さんになんねえ？」

「一体、何を言つ出すのや。」

「授業に出なことお嫁さんなんかできませんよ」

「そう、遊佐さんは授業に出てもいいわなこと。
それが全て。」

放課後、私はある決意を固めていた。

「こうなつたら、睡眠學習しまじょう」

「は？」

「寝ていいです。私が教科書読みますから」

遊佐さんにやる気がないならいつあるしかないと思った。

教科書はちやんと持つてきてる。

「それで勉強できたら誰も赤点とんねえだろ」「少しずつでいいからせりやる氣出してください」

せめてそこからでも始めてほしー。

「楓ちゃんが膝枕してくれたら聞いてやつてもいい」

「膝枕……」

お弁当作つてきたり頑張つてくれるんじゃなかつたつけ？

「俺、耳掻きしてもひつのが夢でよー綿棒持つてくつやよかつたな
「私を何だと思っているんですかーー?」

私は遊佐さんの小間使いじゃないー!

「わーーーーー。でも、俺なりに考えてるんだぜ? もう少し前向

きに
「本當ですか?」

「おー、本當だ!」

それ、本当に信じていいのかな?

虎とお友達

説得作戦から数日、何とか遊佐さんとの距離は縮まってきたと思うけど、一向に遊佐さんが前向きになる気配なし。

でも、いつの間にか煙草やめているし。

この日も私は朝から遊佐さんを引っ張り出でつけました。遊佐さんは私を見るなり、ポケットをパンパンにして……取り出したるはお財布？

「一千円だっけ？」

「え？」

にせんえん？

それは一体何のこと？

「ロールケーキ、一本一千円って言つたんだ？」

「そうですけど……」

そう言えば、さうだった。まったく任務遂行できていなかった。

「煙草止めたから、金浮いた」

「受け取れません」

受け取れるはずがない。

「ロールケーキの呪縛から解放されつぞ」

「それは違うと思います」

うん、絶対違う。お金で解決できるような呪いじゃない。

「ダチでもねえ奴からの頼みだろ？」「でも、賄賂受け取っちゃったんです」

受け取つてしまつたから、もつ存在するはずのないアイツがまだ体の中に存在するような気がする。

「ほどんぢばダチの腰袋に収まつたんだ？」「切つヒナ」

「一口食べちやつたんですね」

「無理矢理押し込まれたつて言つただろ？」「が」

無理矢理押し込まれて一口食べちまつた。吐き出すわけにもいかなくて、流し込んだ。

「その罪悪感に負けて渋々承諾しちゃつたんですね」「そんなの無効だろ。面白を強調したよつなもんだ」

そうかもしれない。そうかもしれないけど、今はそれだけじゃない。

「でも、いいんです。樂しいですから」

「は？」

「男友達ができたみたいで嬉しいんです」

最初は渋々だつたけど、私なりに楽しんでる。
遊佐さんは悪い人じゃない。

友達は優香だけじゃないし、たまに喋る男子もいるけど、友達ってこうほどじやない。

「男友達、か」

「遊佐さんが嫌じゃなかつたらですけど」

遊佐さんにとつて、私は何だろつ。

友達じゃないんだと思つ。ただの迷惑な女？

「そつか……じゃあ、ダチだつたら、武瑠でいーつて

「そ、それは……」

そうやつて笑うつことは迷惑じやないのかもしれないけれど、でも、そんな気軽に呼べるはずがない。

「じゃあ、私は行きますけど、遊佐さんは？」「行かねえ」

ガックリ。今日こそは、つていう期待は打ち碎かれた。

遊佐さんがいきなり授業に出るなんて天変地異が起つるようなきもするけれど。

「気が変わつたらこいつでも来てくださいね」

氣も変わらないんだろうな、つて思う。

遊佐さんが学校に来てる理由がわかれば、少しは何とかできるような氣もするのに、はぐらかされる。

優香も何か知つてゐるっぽいけど、教えてくれない。

「あ、今日のお皿は唐揚げ弁当ですよ」「おひ、楽しみにしてる」

遊佐さんはいつもお弁当を美味しいって全部食べてくれるし、誰かのために作るって案外楽しいんだけど……

「一時間でも授業に出てみませんか？ 働かざる者食うべからず、つていう素晴らしいことわざが……」

「俺、馬鹿だから知らねえ」

一度田のガツクリ。遊佐さんに通用するはずがなかつた。

*

遊佐武瑠、手強し。

説得は難航してるとしか言いようがない。しまいには担任の先生まで私のところに探しにきたり……

委員長達も一回だけ聞きにきたつけ。それだけ。

「楓」

よつ、とか言って教室に現れたのは珍しい顔。

「あ、天真君ー。どうしたの？」

結城天眞君、私の幼なじみの三年生、生徒会副会長。

「結城さんも探りですか？」

「まあ、な」

優香の問いに頷く天真君。

「どうして天真君が？」

私が賄賂受け取ったから？

「結城さんは遊佐武瑠の旧友ですもんね」

「えっ、そうなの？」

「ダチだった、そういうことになつちまうんだろうな」

天真君は、なんか辛そう。話したくないみたいだ。

「喧嘩、したの……？」

「いや、そうじやねえ。けど、俺じやもうどうにもできねえから、あいつのこと、頼むな」

二人の間に何があつたのかわからない。

天真君は教えてくれなさそうだし、優香も知つても言わないと思つ。踏み込んじやいけない氣もするし。

「それとな、楓、稜己が悲しんでたぞ」「南城先輩が？」

天真君は自分の話を終わらせたいみたいだった。

南城稜己先輩は生徒会長。とっても穏やかで優しい王子様みたいな人つてみんなは言つてる。

裏があるって言うか、癖のある人で、キングとか呼ばれてたりするんだけど。

「ああ、お前がそんなにボランティア精神溢れる人間だったなら、どうして生徒会に入つてくれなかつたんだつて」

「いや、これは陰謀渦巻く何とかっていうか……」

「私はボランティア精神があるわけじゃなくて、お隣にいる優香様が噛んでるわけで……」

遊佐さんが言つには、お人好しつことなんだけど、つけ込まれたつてことになる。

「お前がいれば、今頃無敵だつたのに、つて嘆いてる

まあ、要するに南城先輩はちょっと変な人。

「南城、結城、玉城の城トリオで？」

優香は言つけど、そんなわけないって、思った。

「あいつ、結構子供だからな」

天真君の言葉が意味するとこらは肯定。

天真君と仲良くなつた理由も名字に城がつくからつていう共通点的ならしいし、私のことを妹のように可愛がつてくれたりするのもそういうこと。

「結城さんつておじいちゃんですよね、生徒会の」「否定できねえよな……それ。特に瀬山に言われると」

天真君は頭を搔いてる。

生徒会は南城先輩を筆頭に曲者そろいで天真君が一番の常識人つてことになる。

「まあ、それはいい。頑張れよ。あと、何かあつたらすぐ俺に言え」

やつぱり、天真君は私のヒーローだつて思った。

それなら、旧友を説得してほしかつたんだけど、ダメっぽい。

遊佐さんのやる気がないだけで、何があるとも思えないんだけど。

虎の豹変

私の勘なんて、当てにならなかつた。

そういうことなんだと思つ。

その日、いつも通り説得に行つたのに、遊佐さんは笑つて喜んでくれなかつた。

来てほしくなかつたみたいな顔、昨日までは普通に接してくれたのに。何で？

「俺に関わるのは止めとけ」

本当に何で？ 私、何かした？

「何で、急にそんな」と言つたんですか？」

「飽きたから」

「何、それ……？」

飽きたって何？

「煙草、やめたつて言つたじゃないですか」

傍らに煙草の箱、ライター、それから吸い殻。

「やつ簡単にやめられるかよ

遊佐さんからは紛れもない煙草の臭い。

煙草やめたからお金浮いたつて言つてたのに。

「遊佐さん、変です」

「これが俺だ。俺はビーフショウもねえワルだからな。おまえがいじり付きて合ひのりも終わりだ」

「違う、遊佐さんはそういう人じゃない！」

違ひ、違ひ、違ひー！

遊佐さんと話すよひになつて数日だけ、遊佐さんは怖い人じゃない。

そりやあ見た田は怖いけど、でも、優しいところもあると感ひ。

「あんたに何がわかる！？」

「わかりません！でも、授業受けとこう。」「

るせえ

低い声、鋭い視線、怖い遊佐さんに体が震える。
いつも遊佐さんじゃない。

「説得してみるつて言つたの遊佐さんじゃないですか！」「
ウザくなつた。そんだけだ」

じわり、視界が滲む。

何で？ 何でそんなこと言つの？

だって、私、何でも遊佐さんの言つにしたよ？

「遊佐、さん……？」

「犯されてえのか？」

「え……？」

何を言われたのか、わからなかつた。

腕を掴まれて、気付いたら煙草の臭いを思いつきつ吸い込んでた。

遊佐さんの胸に倒れ込んでる。

「それとも、授業に出たらやらせてくれんのか？」

「なつ……」

パツと顔を上げて、遊佐さんのアップ。超アップ。
どんどん、近付いてきて、何が起きたかわからない。
まさか、キス、してる…………？

息ができなくて、遊佐さんの胸を叩くけど、ビクともしない。
酸素を求める唇を割り開いて入り込んできた舌は好き勝手に動いて、苦い。

ファーストキスは煙草の味？

ようやく離れて、私は呼吸を整えるのに必死で、滲む視界の中で遊佐さんが唇を舐めて笑う。

「一発やらせてくれたら一回ぐらい出てやつてもいいぜ？」

カツと頭に血が上った気がして、頬に添えられた手を握って、私は思いっきり遊佐さんの顔を殴つていた。

「つてえな……つー」

「あなたは最低です！ もう遊佐さんなんか知りません……」

遊佐さんの唇が切れて血がでるとか、拳が痛むとか、そんなのどうでも良かった。

私は屋上から逃げるように駆けだした。

屋上から早く遠ざかりたくて、廊下を走っちゃいけないルールな

んて無視してた。

そうしたら、誰かにぶつかりそうになつて、急ブレーキ。

「おつと」

「すみません！」

「……楓？」

「天真君！」

凄い偶然。天真君だつた。

知らない男子つていうか、怖そうな人じやなくて良かつた。

安心したら、ボロボロ涙が出て、天真君が慌てたのがわかつたけど、止められなかつた。

「お前……ちょっと、いじりちこい」

天真君は私の腕を引いて、歩き出すから、私はついていくしかなかつた。

暫く歩いて、天真君が扉を開けて、中に入つて、促されるまま椅子に座つた。

「楓ちゃん？」

その声を聞いて、やつとこがどこかわかつた。

生徒会室だ。いつも南城先輩が籠城してゐるつて天真君が言つてつけ。

「天真、確認しておくけれど、君が楓ちゃんを泣かせたわけじやない

「いよね？ まさか、そんなことないよね？」

違つ、つて否定しなきやつて思つのこ、漏れるのは嗚咽ばっかりで、泣きやまなきやつて思つほどに苦しこ。

拭おうとした手はそつと掴まれて、膝の上に下さられる。

「とつあえず、無理に拭つたりしたらダメだよ。好きなだけ泣くんだ。でも、すぐに冷やさないとね、待つてて」

南城先輩が動く気配がして、それからまた近くにきたと思つたらひんやりするものが目に押し宛てられた。

何だかわからなくて、それを掴んで見てみる。タオルに包まれた保冷剤みたい。

そうしたらまた目に宛てるように促されて従つ。

頬に落ちた涙を多分ティッシュで吸い取るようにしてゐるも南城先輩なんだと思つ。

キングと呼ばれるこの人は何から何まで完璧だ。殿下つて呼ぶ人までいる。

何で、保冷剤がすぐ出てくるのかなんて絶対聞いちゃいけない。生徒会室に冷蔵庫があることにツッコミを入れちゃあいけない。電子レンジや電気ポットがあることにモ。

「一応、事情を知らない身として席を外すけど、弱みにつけ込んで不埒な真似をするようなら わかるね？」

「俺を何だと思つてんだ。お前と一緒にの方が危ねえだろ。空氣読めたんなら、せつと出でけ」

天真君は不機嫌だつた。迷惑かけちゃつたな……

「それで？ デリしたんだ？」

南城先輩が出ていった音がして、天真君は問いかけてくる。その声は穏やかだ。いつだって、そう。私が頼り続けてきた優しいお兄ちゃんの声。

「天真君、何かあつちやつたよ……遊佐さんに嫌われちやつた。飽きたつて、うざこつて」

遊佐さんに言われたことが全部脳内でリピートされて苦しくなる。

「武瑠が……？」

「それで、私、殴つちやつて……」

まさか、人を殴るなんて思わなかつた。

今でも右手は震えてる。私が遊佐さんを……

「あの瀬山が買収されたからには理由があるんだろうけどよ……」

私も単に優香が一本一千円のロールケー キ如きに目が眩んだとは思えない。

親友とか言いながら、よくわかつてない部分も多くて、天真君はちょっと苦手だったりするらしいけど。

「遊佐さんつてどうして留年したの？」

この前、教えてもらえなかつたことを聞いてみる。
今なら、そう思ったから。

「あいつ、ある奴を助けようとして暴力振るつて、それが見付かっ

て、あいつだけ停学になつて、それから来にくくなつたみたいだな

「そう、だつたんだ……」

遊佐さんはやつぱり優しい人だつたんだつて想つと安心した。

噂は悪いところだけはやたら広まるから。

「俺も説得は試みたんだが、ダメだつた。あれ以来、避けられるんだ。あいつ、俺のこと恨んでるかな……助けてやりたかったのに、間に合わなかつたから」

「遊佐さんは恨んでないと思つよ」

遊佐さんからそういう感情を感じ取つたことはない。

誰かを憎んでるとかそういうんじやなくて、いつも屋上にいた遊佐さんは単純に自分の居場所がなくなつたと思つていたんじゃないかな。

多分、もう作れないつて思つて、それでも、学校に來るのは未練があるから?

「あ、でも、学校に毎日來てるのは何でだろ?……リストラされたサラリーマンみたいな感じ?」

「いや、あいつは一人暮らしだから、何か目的あるんだと思つたけど……」

天真君にもわからないみたいだ。

そして、その理由はもう一生わからないのかも知れない。私は遊佐さんに嫌われたから。

「今日の遊佐さん、何か変だつたの」

本当に昨日までは何も変わらなかつた。

飽きたとか「ひきこ」とか言われたけど、でも、私には遊佐さんが今まで嫌々ごっこに付き合つてくれていたようには思えない。そう思いたくないだけなのかもしれないけれど。

でも、日に日に自然な遊佐さんが見れた気がしていた。

「とりあえず、」いちでも探つてみる。だから、お前はしばらく武瑠と距離おけよ。多分、瀬山もさう言つから

「うん、わかった……」

天真君が言つなら、やうするべきなんだと思う。
その上、優香が同じことを言つたら、従わないと大変なことになる気がする。

「……ごめんね、天真君」

「迷惑かけたと思ってるなら、気にすんな。俺が何もできなかつたせいで、なんでかお前に回つてきたんだ」

「でも、南城先輩にも……」

「あいつは、いいんだよ。お前の世話焼くの好きみたいだし? 今度会つたら、ありがとう、って言つておけ」

南城先輩、前はよく会つとお菓子くれたな……それが凄く高級だったり、量が多くつたりして、天真君が「楓を豚にしたいのか」つて言つて落ち着いたんだつけ。

お礼、ちゃんと言わなきや。

「もう少し休んでくか?」

「うん、もう大丈夫」

いつまでも泣いてられないから。
いつまでも甘えてられないから。

用済みの飼育係

結局、天真君は送ってくれて、教室では優香がつまらなさうにケータイをいじつてた。

「あんた、泣いたんだね」

優香様は何でもお見通しつて感じだった。
優香を欺ける人間を私は知らない。

「南城先輩が冷やしてくれたんだけど……」

「原因は遊佐武瑠だね。何、された？……いや、言わなくて」

それも、きっとお見通し。

優香はいつも軽いと思われがちだけど、今はシリアス。

「あいつ、さつき教室に行つたみたいだよ」

「そつか……」

それなら、良かつた。

私の役目も終わつた。そういうことだから。

「楓、約束して。遊佐武瑠には暫く近付かないこと。あたしがいいつて言つまで」

「うん……天真君も言つてたよ」

優香は凄く真剣で、口答えできる空氣でもなく、既に従つことは決めてる。

「結城さんはともかく、あたしの言葉は信じなつて。ちやんと、あんたの気持ちわかつてゐるから」

天真君に苦手意識を持たれてるのを知つてゐるから優香もこじわるしてゐるかもしねえ。

優香は大体天真君を蔑ろにしてゐる。

「じゃあ、今田は帰りに優香さんがケーキを奢つてあげよう」「ほんとー?」

優香が奢つてくれるなんて、珍しい。

「タルトじゃなきや食べないよ?」

私はスポンジとか生クリームとかカスタードとか甘い物がちょっと苦手。

フルーツタルトとかは好き。つまり、ロールケーキは最悪の食べ物。

「駅前のお店の新作レモンメレンゲタルトでどうだつ?」「うん!」

駅前のお店といえば、金魚鉢のパフェで有名なところ。優香のお気に入り。

*

昼休み、教室には、あの極悪優等生院長剣委員長コンビといつか、

カップルがきた。

「遊佐君がついに授業を受けに来ててくれたの。玉城さんのおかげね」

「つむ。君なら、やつてくれると思っていたぞ」

そう言われても、私は遊佐さんに嫌われたし、補習だつてできてないのに。

「じゃあ、後はそつちのクラスの問題ついことで、契約は終わり。ロールケーキの呪縛もなし。オーケー？」

ノーとでも言おうものなら、後が怖い。

そんな優香の雰囲気に一人はうんうんと頷いて、それをと戻つてつた。わざわざお弁当持参してきたのに。

「で、なんで、結城さんがいらっしゃるんですね？」

「まあ、たまにはいいだろ」

昼休みのお客さんは一人だけじゃなかつた。

優香が天真君を鋭い眼差しで見てて、ちよつと怖い。

「あ、南城先輩。朝はありがとうございました」「いいんだよ、当然のことや」

南城先輩は笑顔で返してくれる。とってもスマートな人。とってもスマートに椅子と机を調達して、ここに加わつてゐるわけだし。

「南城先輩は気障ですね。お一人が揃つてると視線が痛いんですけど」

「いいじゃないか、たまには」

南城先輩のスマイルに周囲がざわめく。

先輩は大人気。天真君もだけど。つまり、生徒会は大人気。でも、優香は寧々子先輩のことだって、猫様つて呼ぶくらいだし、生徒会が好きじゃないのかも。

「つーか、楓。何で弁当が二つあるんだ?」

「あ、これは……その……」

「武瑠、か」

鞄の中のもう一つのお弁当箱に気付かれちゃった。
しかも、見抜かれた……！

「あたしのために作つてきてくれたんだよね?」

「おいおい、瀬山。そんなでけー弁当抱えておいて、まだ食う氣か
?」

優香のフォローは嬉しいけど、天真君は納得しなかった。
いや、優香なら私のお弁当までペロリだけど。

「俺にくれよ」

そう言つ天真君だつてお母様特製弁当抱えてるよね?

「そういうことなら、俺がもらつてもいいってことになるよね?」

いや、南城先輩も豪華すぎる弁当持つてますよね?

大体、先輩は小食じやなかつたでしたつけ?

そのお弁当、豪華な割に優香のより小さいですよ?

「さあて、楓。そのお弁当は誰にくれるのかな？」

優香の皿には脣しの色が混ざってる。

天真君と南城先輩までこっちを見てる。

みんな、笑顔なんだけど、笑顔なんだけど……！

「良かつたら、三人で食べてください……」

三人のニッコリがとっても怖くて、そのままの言つのが精一杯だった。納得してないって感じだつたけど、結局、三人で分けて食べてた。同じ釜つていうか、同じお弁当箱の中の『ご飯を食べたつてことで仲良くならないかな？ もう少し。

*

それから数日、遊佐さんを遠目に見るのはあっても、接近することはなかった。

優香が避けてた可能性もある。

でも、優香がいなかつたこの時、私は遊佐さんとバッタリ会つてしまつた。

頭にハンバーグ乗せてる系の人のお友達的な男子と一緒に歩いてたのも見たけど、今日は一人だった。

「遊佐さん……」

呟けば、遊佐さんは Pruitt と顔を背ける。それは逃げていくように見えた。

「何で避けるんですか！？ 普通、逆ですよー。私が避けたいくらいなのにー。」

避けられたことが悲しくて、思わず遊佐さんの腕を掴んだ。
本当は私がプイツつてするべきなのに。

「だったら、好都合だらうが」

「そういう問題じやありませんー。」

釈然としない。全然、スッキリしない。イヤな終わり方だった。
それは解決してないことな気がする。

「うるせえな、ちゃんと授業出でるし、クラスにも馴染んだつもり、
それでいいだろー。」

委員長達は何も言わなかつたけど、ハンバーグ系男子と仲良くさせ
るために授業に出でせたかつたわけじゃないと思つ。

「何で、あんなことしたんですか？」

「別に、理由なんかいらねえだろ」

それがずっと氣になつてた。

ファーストキスだつたのに、煙草なんか嫌いなのに。

「じゃあ、何で避けるんですか？」

「仲良くする理由ねえだろ。」(古勞様でしたつてこと)

挨拶ぐらうしててくれたつていいの。そりゃあ、あんなことされ
たけど、でも、これは悲しい。

こうして冷たくされることの方が遙かに辛い。

嫌だった。でも、何もかもがそうだったわけじゃない。
殴つたことだって、本当は謝りたかったのに。

「キスくらいで“じゅわ”“じゅわ”言つなよ。あ、キスも初めてだったのか？ お堅いしなあ。まあ、“じゅわ”までしたってことだ

ブチッと何かが切れた音が自分の耳にはまづきつい聞こえた。

「ふざけんなー。」

「ああ！？」

それは反射的なものなのかもしれない。威圧的に睨まれるけど、怖くなかった。

「居場所がねえとか、迷惑する奴がいるとか、逃げてただけでしょ！？ 学校に来てるのに授業にでもしないで、それが迷惑じゃなかつたとでも？ 今だつて解決した気になつて、遊佐さんは本当はただの情けない弱虫ですよ！ 見損ないました、本当に。もう金輪際話しかけたりしませんから、ご心配なく！」

言いたいだけ言って、クルリと踵を返す。遊佐さんが何か言つた気がするけど、聞き取れなかつた。聞く気もなかつた。

「玉城さん……」

「玉城君……」

どうやら、超極悪優等生風委員長副委員長カップルに見られてたみたいだ。一人だけじゃない。
でも、どうだつていい。

止め、私は用済みなんだ。もう戻れないんだ。

狙われた元飼育係

未練がなかつたと言えば、嘘になる。

こうなつて初めて、遊佐さんといて楽しかった理由がわかつた。いつの間にか遊佐さんことを好きになつてた。それなのに、最悪の終わり方をした。きっと、上手く行くはずなんてなかつたんだ。

「玉城楓ちゃん、だよね？」

一人きりの放課後、靴を履いたところで目の前にいるのは、ハンバーグ系男子。どう見てもそう。不良以外の何者でもない系男子。その気を抜いたら落ちそうな腰パンは何なんですか。ガムは腹の足しになりますか。

「おい、シカトしてんじゃねえよ！」

ちょっと怒りのセンサー敏感すぎませんか？

ちゃんと牛乳飲んでます？

そう言つ私は小学生の時に担任に無理矢理飲まされて以来牛乳大嫌いですけど。

「人違いです」

「とほけてんじやねえ！」

そりゃあとほけられるなら、そつさせていただきますよ。

「もう一回聞くけど。玉城楓ちゃん、だよね？」

手には明らかに隠し撮りの私の画像が映ったケータイ。わかつてゐなら聞くなよ、と思わないわけでもない。

「そうですけど、何か？」

全速力で逃げたいんですけど、何か？

「君のお友達のタケル君のこと話があるんだけど、来てくれないかな？」

「タケル君なんてお友達はいません」

「おい、次とぼけやがつたら、女でも容赦しねえぞ！」

いや、別にとぼけてません。

タケル君に心当たりがある気はしますけど、お友達なんかじゃありません。

「遊佐だよ、遊佐！」

「遊佐さんは友達じゃありません」

私と遊佐さんは何だろつ。友達じゃない。敢えて言つながら、もう絶交してゐる。

「じめんじめん、カレシだつたか」

「それ、もつと不愉快です。私と遊佐さんは優等生の面しやがつた極悪カツブルにはめられたせいで不本意に知り合つただけで、もう終わつて何の関係もないですから」

何だかイライラしてきた。この人達も煙草臭いんだ。

「そう言わずにさあ、俺らに付き合つてよ」

あーあ、嫌な予感。俺ら、つてことは他にいるんだ。
逃げなきゃいけない。でも、もう手遅れ。

「私、用がありますから、失礼します」

ぐるりと背を向けてダッシュのつもりだつたけど、腕を掴まれて、
その上口を塞がれた。

暴れてみるけど、ビクともしない。

「大人しく付き合ってくれねえと……君のお友達がどうなつても知
らねえよ」

そう言って、見せられた画面に私と一緒に映つてるのは勿論優香
様だった。
ご愁傷様というか何というか……確実に返り討ちに遭うと教えて
あげたい。

この人、優香のこと何も知らないんだ。大人しそうに映つてるけ
ど、大食い系で策士系女子の優花様がいかに恐ろしい人物なのか教
えてあげたいよ。

でも、黙つてたら了承と受け取つたのか、「さあ、行こうか」な
んで言って、肩を抱かれる。ああ、不愉快。

「いてつ！」

思いつきり足を踏み付けて、逃走開始！
でも、上手くいかないわけで……

「君に来てもらわないと困るんだよ。じゃないと、俺らの遊佐が退
学になっちゃうんだ」

別の不良さん、いらっしゃい。退路は塞がれて、後ろは……振り返りたくない。

絶対、遊佐さんの友達じゃないって思った。
遊佐さんの敵だって感じた。

嫌々ながら、脅しに屈したフリでこいつた先は旧体育倉庫。
不良さんいらっしゃいな溜まり場。

中にはそういう人達がいっぱい。絶対絶命。
逃げ場は今塞がれて、ニヤニヤ笑いがここんだりませ。

「それで、お話って何ですか？」

「そんな怖い顔しないでさあ、仲良くなづけよう

いや、仲良くしたくない。したくないんですよ。

肩とか抱かないでください。煙草臭いんで近付かないでください。
また優香に消臭スプレー噴射されるじゃないですか。

「せつせと用件言つてください」

「まずは仲良くなづけようぜ、俺ら」「

何で、顔をそんなに近付けるんですか！？

何とか押し退けるけど、一体何人いるんですか。

いや、私だけペンチなどぐらいわかっていますよ。

「私、忙しいんです。話がないなら失礼します

「そうつれないこと言つなよ」

「触りないでくださいー。」

何で、抱き寄せようとするんですか！？

嫌だ、嫌だ、嫌だ！

「おいおい、楓ちゃん。俺ら、仲良くしようつてのに。そりゃあねえだろ」

だから、こっちは仲良くしたくないんです！

しかも、また脅しとばかりにケータイの画面見せてくるし！
むしろ、その画面から優香様を召喚できないかな……

「一つ言つておきますけど、私のお友達の優香様だけは絶対に怒らせない方がいいですよ。ぶちギレてるようで、理性的だから、やることなすことえげつないんですよ。言葉の暴力なんですけどね。廃人になりますよ」

「脅しじゃない。これは事実。あの腹黒一重人格委員長よりも遙かに凶悪な二重人格。

ほんと、今すぐ優香様が助けにきてくれないかな……

「楓ちゃんぞ、自分の心配した方がいいんじゃない？」

パチンとリボンが外れる音がした。

その手の主めがけてエルボー、離れた隙に急所を狙う。

父親仕込みの金的蹴りは天真君を悶絶させたことだつてある。天真君に何かされそうになつたとかじやなくて実験台にさせられたんだけど。

「うぐう……」

見事に決まって私は出口を日指す。番人と日が合つた。

「てめえ……っ！」

胸倉を掴まれた。でも、好都合。

私はその手を両手で上下から掴む。そして、下の方の肘を乗せる感じで……！

「てつ……！」

よし、膝をつかせることに成功した。私だって多少護身術の心得がある。

後はこのドアを開けて、生徒会室に駆け込めばいい。でも、指先が触れた瞬間、体が後ろに引かれる。

襟を掴まれて、首が絞まつて苦しくて、暴れても足が届かなくて、そのまま体が倒れる。

「げほ、げほっ……」

盛大に埃が舞つて、汚いマットの上に倒れたのだと気付く。その埃臭さから噎せ、衝撃で対応が遅れている内にのしかかられる。

暴れて逃れようとする手に、足が掴まれて強く抑え付けられ、身動きができない。

「おい、てめえら、ちゃんと押えてみよ？ 暴れられちやあ困るからな」

私を見下ろす男が舌なめずりして笑った。

ブチリ、嫌な音がして、何かが飛んだ気がした。ビリッといふ音

まで聞こえる。

「いやつ……」

怖い、怖い……！
叫ばなきや、こんなとこら誰か通る可能性なんて少ない。でも、
もしかしたら……

「口も塞ごじけ。この女、かなり厄介だ」

思いつきり息を吸い込んで大声を出そうとした瞬間、大きな手の
ひらが口を覆う。
他の手は無遠慮に肌を這い回って、怖くて、気持ち悪くて、苦し
くて涙が滲む。
何も見えない。もう何も見たくない、助けて、遊佐さん！

そう思つた時、光が射し込んだ気がした。

「なつ……、ふうっ！」

何が起きたのかよくわからない。変な声が聞こえたと思つたらド
サリと倒れるような音がした。

「何だ、てめえ……！？」

手が一つ外れた。

「ぐうっ……！」

また呻き声が聞こえた。

誰か助けに来てくれた。遊佐さん……？

「ゆ、結城！？」

天真、君……

「な、何でてめえが！！」

「うちの猫の目をなめんなよ？」

その声は確かに天真君だつた。

「俺の幼なじみに手出してただで済むと思つなよ？」

天真君からは恐ろしいほどの殺気が放出されてる気がした。手が次々に外れて、次々に呻きや転がされる音が聞こえる。そして、天真君が私にのしかかってる人の首根っこを掴んで引き剥がしてポイッと投げ捨てる。

それから、私に手を差し出してくれる。

「天真君……」

ああ、やっぱり私のヒーローは天真君なんだつて思つた。

私では全く太刀打ちできなかつた彼らを天真君は軽くあしらつてしまふ。昔から天真君はとても強かつた。

助けてくれてほつとしてる。来てくれなかつたらどうなつてたかわからない。

でも、本当にヒーローになつてほしい人は私を助けてくれないんだつて気付いた。

助け起こしてくれる手は力強い。それから庇うように見せる背は

逞しい。

けど、これじゃない。

「……お前ら、覚悟しろよ」

底冷えするような声で天真君は全員に警告していた。とっくに危険信号、天真君は生徒会一の武闘派だから。

でも、後ろに怪しい影が揺らめいた気がした。何かを振りかざして……

「天真君、危ない！」

とつそこに叫ぶけど、天真君はニッと笑って、まるで後ろが見えていたみたいに、その手を掴んでひねる。落ちたのはどうやら角材？

「やるじゃねえか、結城」

「お前らとは鍛え方が違うからな！」

多分、天真君の長い足による前蹴りが繰り出されたんだと思ひ。それから、私の手を掴んで、出口の方へ押しやる。

「楓、逃げろ！　どこに逃げたらいいかわかるな？」

わからないよ。生徒会室？　職員室？　こんな格好で？
私を逃がすまいと伸びた手を天真君が捻り上げる、早くしろ、と
その口が言っている。

「お前が一番行きたいところに行けよ。一番会いたい奴がいるところだ。そこが一番安全だ。いいな？」

ああ、何だ。簡単じゃないか。

頷いて私は走り出す。全速力で、昇降口まで走って、靴を脱ぎ捨てて、上履きも履かずに駆け出す。

後ろを振り返る余裕はなかった。常に後ろから追いかけられるような妄想に取り憑かれていた。

80

虎と仲直り？

階段を駆け上がって、扉を開け放つ。

「遊佐さん！」

「楓、ちゃん……？」

そこに遊佐さんがいないなんて考えもしなくて、思った通りの姿がそこにあつた時にはほっとして、ガクリと体の力が抜けた。慌てたように駆け寄ってきて、遊佐さんは体を支えてくれた。でも、言葉が出ない。息は切れ切れ、脇腹が痛くて、体に力が入らない。

「誰にやられた！？」

多分、遊佐さんはブラウスに気付いたんだと思つ。一瞬だけ、胸元を見て、それから肩を掴んで真っ直ぐに私を見つめてきたから。けれど、私は搔き合わせるわけでもなく、答えるわけでもなく、遊佐さんに抱き着いていた。

離したくない。たとえ、突き飛ばされても今は、今だけでも離れたくなかつた。

「楓ちゃん……？」

「遊佐さんが好き……」

そう、それが全ての答え。

さつきのことは遊佐さんにキスされた時とは違つた。自分でも落ち着いていたと思つ。でも、嫌悪感でいっぱいだった。

「私、遊佐さんのこと、全然知らないのに……でも、好きなの……！ 好きになつてたんです！」

遊佐さんの反応を知るのが怖くて、ギュッと抱き着く。煙草の臭いはしなかつた。

腕が回されたのがわかつて、引き剥がされると黙つてもつと強く抱き着くけれど、ポンと頭を叩かれただけだった。

「お前が先に言つたじゃねえよ、馬鹿」

抱き締められて、わからなくなる。

「今度こそ俺から言おうと思つたのにな……」

「遊佐さん？」

今度こそ？

わからなくて、遊佐さんを見上げる。

「俺はな、お前よりずっと前からお前のことが好きなんだよ」

じつと見れば、遊佐さんは照れたように頭を搔いて……

「お前がここに来た時、俺は夢を見てるんじゃないかと思った

思い返せば、あの時遊佐さん、ちょっと変だつたけど。言つてること全然わからなかつたけど。

「一田惚れした女が田の前に現れたんだから」

ひとめぼれ？

それは、一体いつのお話ですか？

あれ以前に遊佐さんと接点はないはず。“白虎”なんて怖い人知りません。

「俺が毎日学校に来てた理由は、学校に来ればお前を見ることがで
きるからだ」

「ほ、本当なんですか……？」

からかわれてるんじゃないかなって思う。

だって、この前のことがなかつたみたいだから。

「本人に言えるわけねえだろ」

何で、授業には出ないのに、学校には来ているのか。
その疑問に頑なに答えなかつた理由、確かに納得できる。

「でも、この前……」

「あれは……」

遊佐さんにひどい」と言われた。

あれはもう嫌いになつたつてことじゃないの？ 幻滅したんじゃ
ないの？

遊佐さんが口を開こうとした時、なぜかノックの音が聞こえた。
それから扉が開く。

「取り込み中悪いな」

「……結城」

「天真君！」

ばつが悪そうにしてるのは、天真君。

「まさか、てめえが……」

遊佐さん、急に殺氣立つて、何か勘違いされます？

「違ひ、違ひんです！」

天真君はヒーローなのに。

今にも天真君に殴りかかりそうで、私は必死に遊佐さん抱き着く。何で、そういう誤解をするの？

「滅茶苦茶、頭に血が上ってるじゃねえかよ」

天真君は呆れてるっぽい。

「誰が幼馴染に手え出すかよ。そいつを傷付けようもんなら俺は親父に半殺しにされた拳句に、そいつの親父にトドメを刺される。そんなんごめんだ」

うちのお父さん、天真君に厳しいからな……天真君のお父さんもだけど。

だから、天真君、おじいちゃんとか言われちゃうんだ……相当鍛えられてるつてことなんだけど。

「天真君、大丈夫なの？」

あの人達、どうしたんだろう？

「ああ、猫も呼んで、こっちで処理した。今度はそいつに殴らせる

わけにはいかねえからな「

そう言えば、猫の目がどうとか言つてたっけ。
優香が言つといの“猫様”白河寧々子先輩。

天真君が猫つていう時は大体寧々子先輩。

生徒会の中でもそういう人達を相手にする専門とか思われてる。

「あいつらか?」

「まあ、お前の心当たりのあるあいつらだうつな」

あいては遊佐さんのことよく知つてゐる感じだつたし、“白虎”とか“星高の白い虎”とか言われる人は敵も多いんじやないかって思う。

「俺が関わることやめれば、手は出さねえ、つて言つたのに
「あいつらの言ひ」になんて、信用できねえだろ」

天真君は冷静な突つ込みを入れるけど、遊佐さんが言つたのはどうこいつこと?

「遊佐さん……？」

答えがほしくて見るので、遊佐さんは天真君を睨んでる。

「殴らせりよ、あいつら」

遊佐さんの声は猛獸の唸りのようになんで、息が止まるくらいその視線は怖いほどに鋭い。

怖くて、遊佐さんが飛び出しこんなにしがみつくの、今にも振り払われそう。

「お前はすぐ頭に血が上るし、守るためにいろいろでも人を殴る奴

だからヒヤヒヤした。今度は停学じゃ済まねえからな」

「退学になつたつて構わねえ、殴らねえと気が済まねえんだよ……！」

「ダメだ」

天真君は強い口調で言つけれど、遊佐さんは聞く耳を持たない感じ。

「一緒に卒業できなくなるなんて嫌です！ そんなの嫌です！ 絶対、嫌です！！」

「この手は絶対に離さない！」 セシリウスと抱き着く。事情はよくわからないけど、でも、遊佐さんは授業に圧してくれたし、つかことか言つたのも何かの間違い的なものだと思いたいし。

「楓ちゃん……」

「暴力振るう人は嫌いです」

暴力反対。私は“白虎”の遊佐さんを知らないから。だから、そんな遊佐さんが好きなわけじゃない。

私のアレは父親直伝の護身術であって、暴力じゃないと思いたいし……天真君や寧々子先輩もそう。

遊佐さん、落ち着いてくれたかな。

そう思つた時、またノックが響いた。屋上つてノックするといつだけ？

「結城、あなたがいてお取り込み中つてことはないわよね？」

開いた扉越しに天真君に問いつその声は寧々子先輩の声だった。

「ねえよ」

結城君が答えると、寧々子先輩がすっと入ってきた。

「寧々子先輩！」

抱き着きたかったのに、遊佐さんが許してくれなかつた。自分から抱き着いたとは言つても、恥ずかしくなつてくる。こんなところを寧々子先輩に見られるなんて。
そりやあ、天真君にはもうガツツリ見られてるの。

「えーっと、その格好じゃあ帰れないわよね」

寧々子先輩はさつと顔を背けた。

そうだつた。私のシャツはビリビリ……

「俺のシャツ着ろよ。ねえよりましだろ？」

「あなたの汗臭いシャツなんか、ない方がましよ。さつさと離しながら。ほら、楓ちゃん。じつにおいで」

寧々子先輩は結構ハツキリ物を言つ。普段から不良委員会」と風紀委員会の相手で遊佐さんみたいなタイプも慣れてるだらうし。腕を広げる寧々子先輩を見たら、聖母が光臨したような気がして私は遊佐さんの腕から抜け出してそこに飛び込んでいた。

「ああ、これを貸してあげるから」

ひらりと広げられたのは真っ白なシャツ、胸元には猫のアップリケ。

前に聞いたことがある。寧々子先輩の大ファンの女の子がいて、その子にやつてもらつたんだって。

何だつて、フルーツの名前の女の子。同じ学年だけど、面識ないなあ……

「これ、寧々子先輩の……」

「そう、私の予備、使って」

セリと胸元に押し当たられる。寧々子先輩細いから入るか不安なんだけど。

「お前はよく破くし、汚すからな」

背向けてるからわからないけど、天真君が笑つた。

「あんた達が、私に荒事押し付けるからでしょうね~。じゃなきゃ、十枚もストックしないわよ」

寧々子先輩は悪々しそう。好きで不良の相手してるとわけじゃないって言つてた。

南条先輩が言つには他に適任がないってことじつにナビ。

「遊佐武瑠、あなた、落ち着いたら協力しなさこよ」
「何で俺が……チツ、わかつたよ」

遊佐さんは嫌そだつたけど、寧々子先輩に睨まれて渋々従つた。

遊佐さんにも怖いものがあるのかもしれない。“白猫”は“白虎”

”より強し？

結局、帰り道に遊佐さんがこの前のことを謝罪してくれた。肝心の事情はところどころ天真君の補足が入った。

の人達はかつて遊佐さんに殴られたことがあるらしい。それは遊佐さんが誰かを守ろうとした云々に繋がるとか。

遊佐さんが守ろうとした人は結局、転校してしまったらしい。彼らにいじめられて病院送りにされてしまったらしい。

遊佐さんはそういう人達のために自分の拳を痛めてたって天真君は理解してたけど、賛同するつもりはないみたい。私もそう。だって、それは暴力に暴力で対応するってことだから。

でも、遊佐さんはもう暴力を振るわないって約束してくれた。

今回、彼らの標的が私になって、遊佐さんは私を遠ざけようとして、あんなことを言つたんだって。そうすれば手を出さないって。もちろん、そんなの嘘だつた。私を盾にすれば遊佐さんが何でも従うと思つたらしい。

でも、もう大丈夫だつて天真君は言つた。遊佐さんはこれから授業に出て、補習も受けてくれるつて約束してくれたし。

虎と仲直り？（後書き）

次回、ヒピローグです。

Hプローグ

翌日のお昼、優香はすっかり不機嫌だつた。

眼光鋭く遊佐さんを睨んでる。

そう、私達の教室に遊佐さんがお昼を食べに来たわけで。

「マジなんだな。その色氣のねえ弁当」

遊佐さんは勝手に椅子を用意して、私の隣に座つて、優香のお弁当を覗き込んでる。

屋上にはもう行かないって約束したから。今日は、クラスの方で食べるって言ってたはずなんだけど……

お弁当だつて、朝、教室に渡しに行つたし……

「何で、あなたがいらっしゃるんです？ 楓のストーカーだつた遊

佐さん

「す、ストーカー！？」

優香の声はトゲトゲしてて、私もちょっとこわいくらい。つて言つた、何、その話？

「誤解を招く言い方してんじゃねえよ、二重人格蛇女。付き合つてんだから、当然だろ？」

「あの、遊佐さん、何で優香の一重人格知つてるんですか？ つて言つた、優香、ストーカーつて何？」

優香の一重人格は本当の話、何と言つたか、本性というか、たまに対兄弟用の優香が出てくる。

兄弟仲が悪いってわけじゃないんだけど、やつぱり言い争いには

なるみたいで。

「それより、何で天真と南城までいるんだよ？」

遊佐さんははぐらかすように視線を彼らに向かた。

南条先輩の二ヶ所でちやつかり机と椅子を借りたりして、いつもは一人きりのお昼が何だか大所帯……でもないか。

委員長と副委員長が来たんだけど、やつぱり帰つてつた。

「僕達、お父さんとお母さんだからね」

「こいつは他人の邪魔が趣味らしいからな」

天真君はお守りだと肩を竦めた。

天真君は大変だと思う。南城先輩は曲者だし、その点で寧々子先輩はもっと苦労人だと思う。

「ああ、それで、この男がいかにしてストーカーになつたかって話だつたつけ？」

優香は箸で遊佐さんを指す。いや、ストーカーって違うよね？

「ストーカーじゃねえ」

「あれは停学くらう前でしたね」

「何で、てめえがそこまで知つてんだよ？」

遊佐さん、それは愚問です。優香さんは無敵の情報ハンターです。何知つても不思議じゃあないんです。

“星高の白い虎”ともあろう人が、一日惚れした女に会いたいがために停学に耐え、会いたい一心で毎日学校に来る。何とも涙ぐま

じい話ですねー」

優香の言葉はとつてもわざとらしく。遊佐さんは眉間に皺寄つて
るし。

「それ、マジかよ？」

「へえ、やうだつたんだ？」

天真君と南城先輩が遊佐さんを見る。

「つるせえ、どうだつていいいだろ」

「でも、私、遊佐さんのこと見た記憶ないよ?」

当時からこんな金髪だつたら知つてるような氣もするんだけどな

……

「単に擦れ違つただけだし、当時、楓はとある映画に夢中で、熱心
にその話をしてたから、完全に眼中になし」

とある映画つて何だつたつけ?

大体、天真君か優香に熱く語つてるけど……

「遊佐君、君は意外にロマンティストなのかもしれないね」
「そりなんですか？ 遊佐さん」

南城先輩が笑つて、私は遊佐さんに確認してみるけど、眉間の皺
がより深くなつたような氣がする。

「…………楓ちゃん。その遊佐さんつての卒業しねえ？」

「遊佐さんは遊佐さんですよ？」

「一体、何のことだらけ。遊佐さんは遊佐さんのこと。

「だって、俺ら、付き合ってんだし」

「え、そつなんですか！？」

あれ？ そういえば、さつきもそんなこと言つてたっけ？ 寝耳に水なんですけどー！

思い返してもそつこいつやりとりがなかつた。

「そつなの？ 天真君」
「俺に聞くんじゃねえよ」

天真君がちよつと不機嫌になつた。

でも、天真君はある意味立会人なんだし……

「俺に熱い想いをぶつけてきたんだ。そりゃあ、つまり、そういうことだろ？」

遊佐さんが当然のように言つた。

そ、そつやあ、なりゆきで告白しちゃつたし、遊佐さんも好きだつて言つてくれたけど、付き合つて単語はなかつたし。

「嫌なのかよ？」

「嫌じゃないです！」

嫌なわけがない。

「じゃあ、呼べんだる、名前で」

それとこれとは別の問題だと言いたい。

急には無理というか、照れるというか、優香の視線が怖いというか……

「遊佐君、君、ちょっと図々しくないかな？ 君より付き合いの長い僕でさえ未だによそよそしい呼び方されてるのに。結城も白河もするいよね」

南城先輩、何か怖いです。名前で、とは言われてたけど、でも、南城先輩ともそんなに親しいわけじゃあ……ないですよね？

だって、天真君は幼なじみだし、寧々子先輩は……何でだらう？

「まあ、テストで結果出さない限り誰も認めないでしちゃねえ？」

結城さん

「意味ありげに俺を見るな、瀬山」

また優香と天真君の間には微妙な空気。ちょっと怖い。

「テストなんかに邪魔されてたまるかよ！ んなもん、楽勝だ！」

「あ、言いましたね？ 赤点、ダメですからね？」

にいっと優香が笑った。乗せられたら負けなのに……

「一緒に勉強しましょうね！」

「うなつたら、それしかない。私も勉強する！」

そう決意したものの、結局、真面目なテスト勉強の仕方もわからぬ私がどうにかできるわけもなく、あの極悪優等生カツブルを頼

る」とになつたのは、いつまでも……違つた。言つたくないことである。

遊佐さんは赤点こそ回避したけど、本当にギリギリで、勉強の日々が待ち構えてた。

でも、私達はいつの間にか認められて、周囲からバカップルと言われるまでになつてしまつたわけで……

まあ、これが平和で、幸せ、なのかな？

HPLローグ（後書き）

これにて、純情ロールケーキ完結です。
いずれ番外編なんかも書きたいなあと思いつつ、同じ高校を舞台に
したオムニバスの一つとして考えていた話なので、他の話もその内
書きたいです。

星高の正式名称が何なのか、とか（出してないことに今気付いたな
んて言えない）フルーツの名前の女の子とか、猫様の活躍とか：
ではでは、ここまで読んで下さりありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3823w/>

純情ロールケーキ

2011年10月9日21時40分発行